

三井良太郎 「少年像」

(会員)  
秋山功  
伊東總吉  
薄井良昭  
宇都宮義文  
太田貞雄  
佐々木征  
佐藤裕幸  
杉野和夫  
鈴木忠男  
野口勉  
野原宏  
福井豊  
堀良慶  
和田孝明

(ゲスト)  
和田幸子

(敬称略・50音順)

NPO法人あーと・わの会 通称：「わの会」

## 第47回放談会



2016年10月9日(日) 13時～16時  
於 東京・京橋区民会館 洋室3号室

## 第47回放談会

1. 日時 2016年10月9日(日) 13時~16時

2. 場所 東京・京橋区民会館 洋室3号室

3. 出席者(計15名 敬称略:50音順)

<会員> 秋山功 伊東總吉 薄井良昭 宇都宮義文 太田貞雄 佐々木征  
佐藤裕幸 杉野和夫 鈴木忠男 野口勉 野原宏 福井豊

堀良慶 和田孝明

<ゲスト> 和田幸子

4. 司会進行:佐藤裕幸 書記:鈴木忠男 写真・編集制作:野口勉

5. 放談会(発表順)

### ① 宇都宮義文



作家:不詳 「無題」 油彩・板 34.0×25.0cm 制作年:不詳

①会員の小松先生に対抗出品。

②説明不要。但し、某コレクターが「自分が欲しい絵だ!」と言ったのでハナが高かった。

③「てふてふ」が舞っている絵である。

④何故か頭を右側に横たわる絵が多いが、理由は不知。

<談>宇都宮:早池峰堂で目録に出る前に購入した。

佐々木:隠れサインがあります「M・・」不詳です。

## ② 佐々木征



伝：本多錦吉郎 「静物（菊花図）」  
油彩・板 22.5×16.0cm 制作年：不詳

晩年は、日本固有の趣味に移って茶道と庭造法の研究を送った。そのためか後半は初期のような緻密な作風の作品を描いていない。  
絵も楽しむ方向に軌道修正し、小品を描いては知人などに差し上げたと推測できる。

ほんだ・きんきちろう

嘉永3年～大正10年（1850～1921年）  
芸州藩士の子として江戸に生まれる。画塾・彰技堂で国沢新九郎に洋画を学ぶ。明治10年国沢没後は、彰技堂を継承、丸山晚霞・岡精一をはじめ多くの門人を育てる。明治22年明治美術会の創立に参画、翌年第3回内国勸業博覧会に〈羽衣天女図〉を出品し褒状を受けた。明治洋画の先駆者のひとりとして活躍した。

「図解庭造法」（明治23年刊行、2007年復刻版）を回覧。



## ③ 堀良慶

清水良雄（1891～1954年）

「静物（洋梨）」 油彩・キャンバス 24.4×41.5cm 制作年：不詳（推定戦前の作）  
（裏に東京銀座 洋画店・青樹社779の出票がある）



清水良雄は、最も活躍した帝展時代（含む文展、特選4回受賞）、外光派の技法を継承して主観的表現の意欲に動かされつつも、平穏な明るい画境に安住している新進であった。その後も変わらず光風会、帝展、日展に出品を続けた。人物像が多いが風景画、静物にも良い作品がある。当作品は梅野隆さんの旧蔵品です。梅野さんは「私は官展系作家を集めてないが官展には多くの良い作家がいる」と言われていた。梅野さんの愛読書は森口多里の美術50年史、80年史でした。梅野さんは本が擦り切れるほど読んだ。当戦前の日本美術史レポートが発掘顕彰のバックボーンとなり拠り所となった。

<談>福井：童話雑誌「赤い鳥」の表紙画を描き、童画家として有名です。

#### ④ 秋山功



森本秀樹（1951年生）「ユキと海」 油彩・キャンバス F0号 制作：2014年

森本の作品の魅力に惹かれ、集めた作品がすでに10点近くになった。まだ一部にしか知られていないが熱烈なファンが多く、コレクターたちが何度か「ぼくらの森本秀樹展」を開催。

宇和島で生まれ、武蔵野美短大・油絵科に学ぶ。そこで得たものは美術に関するのではなく、民俗学者の宮本常一の講義内容だったという。庶民の視点で新たな歴史の原像を掘り起こした宮本同様に森本作品に描かれた人物や風景には、人々の営みが何の誇張もなく淡々と表現され、その情感や温もりが見る側の思い出や記憶を呼び覚まし、郷愁を誘う。出品作も小品ながら自らの少年期が甦り懐かしい。今年4月から6月に地元のミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）で大規模な展覧会が開催された。今後益々評価が高まっていくに違いない。

<談>秋山：しらみず美術（銀座、閉廊）で初めて見た画家です。鈴木：自分も10点以上持っていて「ぼくらの・・・」（2000年）に出品し、梅野記念絵画館の個展（2007年）には、4、5点貸出ました。

#### ⑤ 伊東總吉

野田哲也

「日記 1972年10月25日」 リトグラフ、シルクスクリーン、木版

43.5×60.0cm 10/30 制作：1972年

（1974年ノルウェー国際版画ビエンナーレ 第2席）



画面手前左右の布団状の青色物体は何を暗示しているのか。背景の写真は、聖路加国際病院（取り壊される前の旧館）の廊下であることは床面から知れる。

制作の時の思い、狙いは？

本作が国際版画展の2席ということは新カタログで知りました。



## ⑥ 和田孝明



青山熊治（1886～1932年） エル・グレコ作「聖衣剥奪」の模写  
油彩・キャンバス F8号 制作年：不詳

明暗のコントラストが強調され重厚なリアリズムを追求した初期の作品から、セザンヌ等を学習した渡欧を経て晩年に至る。その間、青山の画業に通じるものは独特の色彩感覚、ダイナミックな構図、そして時流におもねらない精神より生みだされた芸術性にある。本作品は、リヨン美術館の「聖衣剥奪」を模写したものと思われる。

兵庫県生野町生まれ、東京美術学校中退（黒田清輝に師事）、1913年中国大連からシベリアを経てヨーロッパに入り放浪の旅を続ける。パリそしてリヨンで働きながら制作を行い画技を磨いた。1922年帰国。1926年第7回帝展に「高原」を出品し、特選と帝国美術院賞を受ける。その後も出品を続け同展審査員を務める。1932年、故郷生野町で急病、46歳の生涯を終える。

<談>和田：版画堂で購入した。堀：版画堂は何点も扱っているので問題はない。

## ⑦ 佐藤裕幸

伊勢正義（1907～1985年）「静物」 油彩・板 F4号 制作年：1964年



秋田県出身。東京美術学校で藤島武二に師事する。帝展、光風会展で特賞。1936年、新制作協会創立会員として同会を主な活動の舞台として作品を発表する。油彩画のほか、挿絵も描いた。貝殻や蝶の収集に凝っていたことでもわかるよう一生涯美しい物への限りない憧れを抱き続けた。



そうした気持ちの自然な発露として度々、海外にも出かけた。

<談>佐藤：いのは画廊で購入した。背景の6色が写実ではなく不思議、瓶が前にあるのもおかしい、入っているものは枯れた花か。

⑧ 鈴木忠男



女兒祝着 プリント図柄「鳩群図」身丈（肩から）90cm 制作：昭和30年代位

2013年マイコレ展（美楽舎）に出品したものの。  
毎回3点出品して内1点を古布にしている。  
鳩図が珍しいので購入した。着物コレクションは、30点位あり。

<談>鈴木：今日はどしゃ降りの中、例年通り府中市立美術館（無料日）に行き、ポスターを15枚入手、「藤田嗣治展」を見て来た。

⑨ 太田貞雄

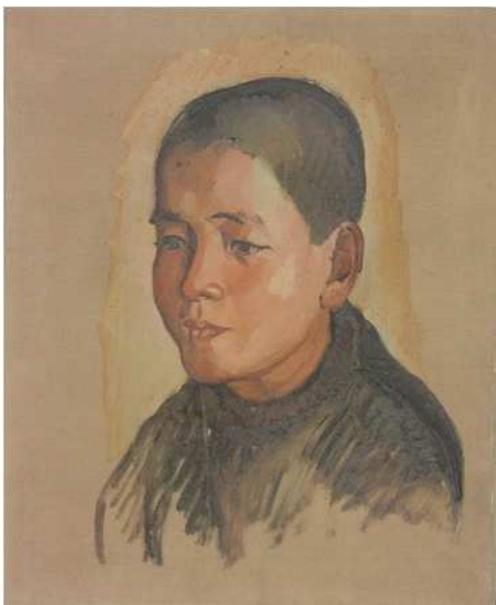


伝：川端龍子（1885～1966年）  
「富士」油彩・板 F4号  
制作年：1913年以前

和歌山市生まれ。1904年葵橋洋画研究所、太平洋画会研究所で学ぶ。  
国民新聞社などに勤め、挿絵を描いて知られるようになったが1913年にアメリカを旅行し帰国すると日本画に転じた。1915年再興日本美術院展に「狐の怪」が入選、翌年には「霊泉由来」が樗牛賞を受賞するなど頭角を現し、1917年には同人に推された。1928年脱退、青龍社を創立、1959年文化勲章、1962年龍子記念館（東京都大田区）を建設。

<入手経緯>元の所有者は画廊より購入とのこと（真筆の由）。  
元の所有者は、この絵を龍子記念館に持ち込み見てもらったところ、アメリカに行くための資金を稼ぐため人気のある富士の油彩画描いたものと考えられるとのこと。  
若書きのためか安価。真贋不明。

⑩ 福井豊



三井良太郎（1890～1937年）  
「少年像（画家の甥）」油彩・キャンバス  
45.5×38.0cm 制作：1936年（未完）

先月、当会HP「わの会の眼」サイトを見た画家の姪にあたる千葉縣市川市在住の和爾彌榮子（わに・やえこ）氏より当会事務局に連絡があり、小生がお会いしてお預かりした作品。画家が再渡満する前年、夫が駐屯の軍医であった妹の和爾美芳のいる朝鮮京城近郊の龍山に立ち寄り、美芳の長男・10歳頃の和爾孝政を描いた一枚。未完でサインもないが利発そうな甥の表情を観察描写する画家の眼は暖かい。和爾彌榮子氏は、美芳の六女で孝政の直近の妹になる。

東京生まれ。白馬会溜池入門、黒田清輝に師事。1908年白馬会葵橋洋画研究所幹事。16年渡満、大連洋画研究所を設立。満鉄沿線を巡回指導。22年満鉄事務嘱託。27～36年渡仏。37年再渡満、新京洋画同好会を開設。新京で没、享年47歳。



⑪ 薄井良昭



近藤克美（1949年生まれ） 「ネギ」 油彩・キャンバス SM号  
制作：2015年推定

九州門司市在住の現役油彩画家の作品。福岡市早良美術館でたびたび画展を開催している。都心では、やっと秋の気配が感じられる今日この頃、この画題に誘われて持参致しました。

⑫ 杉野和夫



竹山栄一（1937年生まれ）「ローテンブルグ市庁舎」紙・水彩 11.9×11.9cm  
制作：2004年頃

ロマンチック街道ツアー旅行中に購入した。ローテンブルグの町を散策中に日本語名を書いた画廊があったので、ちょっと覗いたら声をかけてきたのが竹山先生でした。その時は、もちろん画家の名前も知らず、無名な画家が海外取材で来ていたのだらうと思いました。竹山さんは、中世の町の魅力とそこに根付いて住み着く決意を熱く語ってくれました。ちょうどローテンブルグのおみやげを探していましたので本作品を購入しました。小品ながら綺麗でメルヘンチック、気に入っております。

⑬ 野原宏



井上長三郎（1906～1995年）「無題」油彩・キャンバス  
17.5×13.5cm 制作年：不詳

井上長三郎の作品は、あまり興味もなく見ておりませんでした。最近いろいろな所で話題になり関心を持つようになりました。他に類のない画風の作家であることを認識しました。反体制、版画壇の狷介な一匹狼のイメージを持っていましたが、もう少し広い心で絵を見てみたいと思います。

<談>鈴木：「藤田嗣治」を書いている笹木さんは、戦争画の対比として井上を取り上げている。

⑭ 野口勉



内田静馬（1906～2000年）  
「秩父山塊」木版画 26.5×36.0cm 制作：1971年

第16回新世紀美術協会展（71年）に出品した「秩父山塊」54.0×77.3cm（国立国会図書館収蔵）を5号大に翻案した普及版である。雲の合間から覗く黒々とした山容の要所要所に添えられる淡い青色がアクセントになっている。2005年川越市立美術館による顕彰から再評価された。内田の作品はこれで9点となった。なかなか市場に出せない希少だ。

「孫娘とじーじのお絵描き遊び」を紹介

幼稚園児（6歳）の孫娘と週末は絵を描いたり版画をやったりして遊んでいます。末は世界的デザイナーになってくれたらと勝手に想像しています。（冗談）



孫娘4歳時の作品「じーじ」アクリル



私の落描き「愛犬チャリィ」鉛筆

○放談会修了後、希望者会員10名で懇親会を実施しました。

○次回放談会は平成29年1月に実施予定です。

<編集後記>

連休2日目、この日は各地で地域体育祭が予定されていたが雨天のため中止になったところが多かった様子。私も雨のおかげで地元が中止となり、放談会へ参加することができた。

心地よい肌寒さが絵の鑑賞意欲を増す。

今回も多様な作品群、参加会員皆さんの熱い心が響く。次回も興味深い作品が集まるだろう。（の）

\* 作品記事は、各自が当日提出した紹介文を基に編集掲載しています。

発行：NPO法人あーと・わの会 通称「わの会」

発行日：平成28年10月吉日

編集：実行委員

佐藤裕幸（司会進行） 鈴木忠男（書記） 野口勉（写真・編集制作）

連絡先：事務局 〒277-0871 柏市若柴1-358 堀良慶

TEL 04-7134-8293 ryokeihori@yahoo.co.jp

発行部数：80部